会期：2019年7月1日（月）～9月30日（月）

Book List 沖芸の先生による、今読むべきこの15冊 Vol.1

夏休み！映画を深く観るための15冊

選者：土屋誠一（沖縄県立芸術大学美術工芸学部准教授、近現代美術史／視覚文化論）

県立芸大の先生が選ぶおすすめ本！

石岡良治
『 視覚文化「超」講義 』

フィルムアート社、2014　/361.5/I81/

いま、「映画」をめぐる環境は、とても多様化しています。映画館はもとより、タブレットやスマートフォンの画面で観るという場合もあるでしょう。映画作品自体も、様々なジャンルに分化され、難解なものからエンタメ系まで幅広くあります。けれども私たちは、そのように多様な「動画を観る環境」と、特に違和感なく付き合っています。この本は、そのような映画も含む「目で観る作品」（視覚文化）全般を、縦横無尽に語りつくしています。本のタイトルどおり、「講義」のかたちで語り下ろされていて、とても読みやすい本書を読むことで、そもそも「映画を観る」ということはどういうことか、考えてみるきっかけになるでしょう。

ベラ・バラージュ
『 映画の理論 』

佐々木基一訳、學藝書林、1992　/778.01/B16/

19世紀末に、その装置の基礎が発明された「映画」は、1910年代にはいわゆる「物語映画」の基礎的文法も確立されました。この近代に入ってから新しく出現した「文法」は、当時の進歩的思想をもった知識人たちを魅了し、さまざまな立場からの映画の理論化が試みられてきました。ハンガリーの映画理論家（『ほんとうの空色』（岩波少年文庫）などの物語も書いた、文学者でもありました）であるバラージュ（1884-1949）は、そのような知識人の代表的なひとりですが、原著が 1949 年に書かれた本書は、1920年代に既に映画理論について取り組んでいた彼の、集大成的な著作です。映画をどういう理屈で捉えることができるのか、その一端がわかると思います。

トーマス・ラマール
『 アニメ・マシーン グローバル・メディアとしての日本アニメーション 』

藤木秀朗監訳、大崎晴美訳、名古屋大学出版会、2013　/778.77/L15/

いわゆる「アニメ」の表現の確立は、ウォルト・ディズニーの貢献が大きいですが、どういうわけか日本では、今日に至るまで、大量の作品が制作され続ける「アニメ大国」となっています。カナダの日本文化研究者であるラマール（1959-）は、子ども文化、オタク文化とみなされがちな日本のアニメを、映画理論や現代思想の知見を用いつつ、アニメという一般的には価値が低いと見做されがちな表現が、実のところ、いかに複雑で、豊かなものであるのか、様々な作品に具体的にアプローチしながら、解き明かしていきます。この本を一読すれば、アニメの見え方が、根本的に変わります！

沖縄県立芸術大学
OKINAWA PREFECTURAL UNIVERSITY OF ARTS

B/778.253/H39/

蓮實重彦
『ハリウッド映画史講義』

筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2017

北米における巨大産業でもある、物語映画の生産地、「ハリウッド」。そこには、単に「娯楽映画」の制作スタジオという側面だけでは語りきれない、様々な陰影があります。今日に至るまで、映画の覇権を握る「ハリウッド」とはなにか、それを理解するための鍵がここにあります。

/778.21/O99/

デヴィッド・ボードウェル
『小津安二郎　映画の詩学』

杉山昭夫訳、青土社、1992

国際的に評価の高い、日本映画の大巨匠、小津安二郎（おづ・やすじろう、1903-1963）の主要作品すべてを、北米の著名な映画研究者が論じ尽くしたのが本書。「世界のOZU」の映画を観たことがあれば楽しめるし、観たことがなければ小津の作品が観たくなるはず！

/778.233/SA13/

ジョルジュ・サドゥール
『チャップリン　その映画とその時代』

鈴木力衛・清水馨訳、岩波書店、1982

日本語訳版でも全12巻（！）におよぶ『世界映画全史』（国書刊行会）で知られる、フランスの映画評論家による、喜劇映画の巨匠、チャールズ・チャップリンについて書かれた本書。優しさと悲哀に満ちたチャップリンの作品が、いかに芸術的価値が高いのか、深く理解できる。

/778.253/H77/

トリュフォー
『定本　ヒッチコック　映画術』

山田宏一・蓮實重彦訳、晶文社、1990

フランスの名匠トリュフォーが、サスペンス映画の巨匠アルフレッド・ヒッチコック自身に、その数々の名作の「映画術」についてインタビューした本書。「映画監督」は、こんなにも深く「どう映画を作り上げるのか」について考えているのかと、腰を抜かします。

/778.09/KA86/

加藤幹郎
『映画館と観客の文化史』

中央公論新社（中公新書）、2006

今や映画館といえばシネコンかもしれませんが、映画創成期から今日に至るまで、映画館とそこに集う観客のあり方は、その時代ごとに、ずいぶんと変化しています。昔はこんなふうにして、人々は映画を観ていたのか！と驚くことうけ合い。

/778.7/B23/

エリック・バーナウ
『ドキュメンタリー映画史』

安原和見訳、筑摩書房、2015

動いている対象を「記録」することを可能とした「映画」という装置は、物語映画のみならず、「ドキュメンタリー」というジャンルにも展開し、今日その意義を減じていません。本書は、そのドキュメンタリー映画の歴史的展開を把握するための、最良の手引きです。

/778/A79/

ルドルフ・アルンハイム
『芸術としての映画』

志賀信夫訳、みすず書房、1960

ゲシュタルト心理学の立場から芸術を論じたパイオニアのひとり、アルンハイム（1904-2007）が、映画について論じた古典的著作。私たちは「動く映像」をどのような視覚や心理のメカニズムを通じて認識しているのか、古くて新しい問題が論じられています。

/778.04/Z5/

伊東美和・山崎圭司・中原昌也
『ゾンビ論』

洋泉社、2017

夏といえばゾンビ！　1960 年代に確立された「ゾンビ映画」というジャンルは、今も私たちの恐怖心を煽ります。なんでグロくてコワいゾンビなんて、私たちはわざわざ観たがるのか、三人のゾンビ通の評論家たちが、その面白さをアツく語っています。

/778.77/H93

氷川竜介
『細田守の世界』

祥伝社、2015

いまや、国民的アニメ作家と言っていい人気を博す、アニメ監督の細田守。その細田による作品の、物語的側面の特色や、作画の工夫について、アニメ評論の第一人者が、懇切丁寧に論じているのが本書。細田監督の過去作品を観なおしたくなるはず！

/721.2/TA33/

高畑勲
『十二世紀のアニメーション 国宝絵巻物に見る映画的・アニメ的なるもの』

スタジオジブリ、1999

先年、惜しくも亡くなった、戦後アニメの巨匠である高畑が、「絵巻物」という東洋の古い絵画形式のなかに、「既にアニメ的なものがある！」と論じるのが本書。12 世紀の絵巻と、20 世紀以降のアニメが、本当に繋がっているのかどうか、一考の価値はあるはず！

/778.04/G55/1

ジャン＝リュック・ゴダール
『ゴダール全評論・全発言 1』

アラン・ベルガラ編、奥村昭夫訳、筑摩書房、1998

生けるレジェンド的映画監督ゴダール（1930-）本人による、まだ若かりし頃のテキストが集成された書物。とかく難解な映画を創る監督として知られるゴダールの、その「映画哲学」について触れることができる。なお本書は、第 3 巻まで日本語訳が刊行されています。

K/302/N46

仲里効
『オキナワ、イメージの縁』

未来社、2007

現代沖縄において重要な批評家である仲里が、戦後に沖縄をテーマとした様々な映画作品について深く論じつつも、「戦後沖縄」をどう思想的に把握するかを問う。映画本であると同時に、戦後沖縄思想史についての本でもあるという、奇跡的名著！